

武蔵野大学しあわせ研究所第5回シンポジウム  
「不可避的な病災害のなかでの  
しあわせ学」序説」報告

主任 一ノ瀬正樹



令和3年1月11日に有明キャンパスにて、しあわせ研究所第5回シンポジウム「不可避的な病災害のなかでのしあわせ学」序説を開催いたしました。新型コロナウイルス感染の状況に照らして、スピーカーと関係者のみ有明キャンパスに集い、聴衆の皆さんとはオンラインでつながるという形式での実施でした。ご手配をいただいた萩本課長様、柚口様には、心よりの御礼を申し上げます。このシンポジウムは、コロナ騒動のなかにおいて、私たちの「しあわせ」というのは、実はつねに災害や病気に囲まれているという私たちの現実を踏まえなければ、ただのお話になりかねない、むしろ、「しあわせ」は病災害のなかにおいてこそ追求されるべきものなのではないか、という改めての気づきに至ったことに端を発します。東日本大震災からちょうど10年目という、節目の時期であったことも今回のシンポジウム開催の動機です。そうした趣旨と動機の下、おもにはコロナ問題に焦点をあわせる形で、まずは事実を洗い出し、議論の足場を築いていきたいと考えました。

最初に、西本照真所長より力強い開会の辞をたまわりました後、早速に、東京農工大学のコロナウイルス研究の専門家である

水谷哲也先生に基調講演をいただきました。コロナウイルスそのものについてのウイルス学的解説をいただき、ワクチンの意味について最新の知見を提供いただきました。その後、5名の本学教員から、各専門分野に基づいた提題をいただきました。まず、薬学部の永井尚美先生から、コロナウイルスワクチンをはじめとする、新医薬品の承認審査の実際について発表いただきました。次いで、文学部の藤原克己先生より、鴨長明『方丈記』に沿った、古代・中世の日本人が地震などの災害多き環境の中でどのように生き抜き、どのように無常の世を眺めてきたのかのお話をいただきました。続いて、看護学部の中板育美先生より、看護の立場から、いわゆる「自粛警察」の問題などに絡めて、この困難時にどのようにレジリエンスを培っていくのかについてご発表いただきました。そして次に、人間科学科の日野慧運先生から、日本の古代の仏教文化の中で疫病がどのように受け取られ、仏教がそれにどう対応したのかについてお話しいただきました。そして最後に、私一ノ瀬が、感染症倫理の諸論点について話題を提供いたしました。その後、大変にホットで有意義なパネルディスカッションを経て、最後に石上和敬副所長より滋味深い閉会の辞をいただき、きわめて学際的で時宜に合ったシンポジウムを終えることができました。終始サポートをいただいた渡部博志主任にも深く感謝いたします。本シンポジウムの内容は、近々書籍化する予定です。